Entry No.❸　（本選）

私が見つけた５つの「遊び心」

「授業デザイン」に必要な３つの力。【読解力】【要約力】【編集力】。

本書は、その具体的な事例を様々な方法（QR コードやお悩み相談まで）で提案された、これまでに例のない一冊である。

学習者の立場に立って、正しいゴールを設定し、そのときに必要なことを感じ取ること【読解力】。本質を取り出し、内容をできるだけシンプルにすること【要約力】。生徒の感性を大切にし、生徒とともに授業を紡ぐこと【編集力】。この「３つの力」が身につくと、教師の好奇心は旺盛になり、「**遊び心**」で満ち溢れるという。

編著者である中嶋洋一先生は“わくわく授業づくり”の達人だ。そのコツは、タカの目とアリの目を使い分けること。私も、自分の「タカの目（俯瞰力）」を磨きたい。グーっと引いて「全体」を見て、中嶋先生の「遊び心」を解明してみよう。

（１）ちりばめられた「伏線」

遊園地などにある「巨大迷路」で遊んだことはあるだろうか。例えば、「入り口」が選べるものであったらどうであろう。簡単で短時間・旅人コースは青。難関に挑戦・勇者コースは赤。不思議で面白い・魔法使いコースは黄。「どこからでも、あなたの好きな入り口からどうぞ」と言われたら、一気にテンションがあがるだろう。

「え、本書の読み方にコースがある！！どれにしようかな。」

本書も冒頭で、３種類の「読み方」が提案されている。読者のニーズに合わせて、「読み方」を変えれば、その答えが回収できるようになっている。「相手目線」と「自己選択」、「自己決定」。“わくわく”の布石はすでに置かれていた。

５つの章を、「森」「林」「根っこ」編として３つに分けて収録してあるのも面白い仕掛けだ。「森」は総論（授業づくりの全体像）。「林」は各論（授業の具体）。「根っこ」は全ての土台（見えない部分・精神）。どこから読んでも、この「根っこ」の部分は重要であることを連想させる。「すべての根幹。ここをしっかり鍛えることが大事。」と襟を正される。

各章の「扉」にも注目したい。封筒から飛び出した「手紙」。そこに添付されている４つの「格言」。「格言は、自分がそうか！と納得できたとき「名言」となります」。まじまじと読む。本編とのつながりを、探さずにはいられない。読み手の“知りたい”をかき立てる仕掛けに、またも“わくわく”が発動する。この先の展開（つながり）を見通しているからこそ張れる「伏線」。全体を俯瞰しているからこそ置ける「布石」。初めに示し、投げかけておく。「伏線」を自分で回収できるという「自己選択」「自己決定」が、「“わくわく”授業」には欠かせない。

（２）日常に密着した「メタファー(比喩)」

みなさんはお気づきだろうか。「親指」から始まり、「小指」で終わるこの壮大なストーリーを。まるでこの１冊が中嶋先生の「大きな手」に包まれているようである。AL を可能にするために必要なこと。それは３つの「～ize（～化する)」だ。本書は全編を通して、その１つである「Visualize」（脳にイメージを与えること）を意識されている。

アニメ、映画、料理、服飾、絵画、小説、音楽、スポーツ、車、野菜にいたるまで、私たち読者のそれぞれの日常に寄り添った「たとえ」で、イメージを具体的に持たせ、納得感を作りだしている。「比喩」は、ある事柄を別の事柄に置き換えて言い表したものである。「比喩」が成立する条件は、「例えるもの」と「例えられるもの」との間に「共通点」があり、それが広く読者に「共有」されていることだ。本書の比喩は、読者の「生活の論理」と見事につなげられ、「学習者（読者）の心理」に密着したものとなっている。「具体」は「相手目線」。生徒にとって身近な題材は、彼らの「共感」を大いに引き出してくれるだろう。

（３）気づきを促す「エピソード」と「比較」

A 先生、B 先生、C 先生・・・一体、本書には何人の教師が出てこられたか。

書かれた「文章」、授業内の「発言」、例示された「指導案」、筆者との「対話」、など形式はさまざまである。いずれも内容の「比較」を通して「違い」に気づかせたり、具体的な場面やエピソードを通して「イメージ」を深めたりと、読者に「自分で気づかせる」ための工夫がされている。「エピソード」は人を脳動的にさせる。いかに想像力をかき立てられるか。この具体をどのように語る言葉を持つかが、教師の生命線であろう。具体と抽象のもたらす効果を、本書では身をもって体感することができる。

「太宰治はシラー『人質　譚詩』を基に『走れメロス』を書き上げた。

《 勇者はひどく赤面した。》この一文を、太宰が書き加えたのはなぜだろう。」

人は比べられるとそのギャップを意識し始める。違いは何か、それはなぜか。教師から説明されるよりも先に、自分で考えたい、気づきたい。そんな気持ちがわいてくる。答えが出なくても構わない。自分で考えだすきっかけを与えることが肝要だ。「エピソード」が語れるのは、その本質が分かっているからだ。「比較」を提示できるのは、導く先（ゴール）がわかっているからである。「３つの力」が備わっているプロの教師は、こうして生徒の気づきを促している。

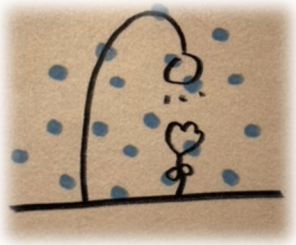
（４）「個性」と「参画」を引き出す「協働」

中嶋先生は、本書を他４名の名だたる先生方と共著で書いておられる。「協働」とは、異なる能力（個性）をもった者が協力し合い、互いに補完しあうことだ。本書では、そのプロセスにおいて互いによい影響を与え合い、生産的で創造的な取り組みであることを取り上げている。これを「参画」という。各章が各々の得意分野（知識）を生かして、得意な書き方で書き上げられたことが分かる。初めの三行で心をつかみ、終わりの一行で納得させる。「問いかけ」を用い、具体でイメージを補いながら、一歩ずつ次の展

開へ誘導する。決して読者を一人で取り残さない。「目的」を共有しているからこそ、「協働」が成り立つ。同じゴール（目的）を目指して、それぞれが得意な方法で文章を展開する。「授業」も「学校組織」も同様だ。「協働」とは「参画」すること。人が参画するときは、「楽しい」と思える「ゆとり」や「居心地の良さ」が必要だ。それを生み出すのが「遊び心」。生徒と作り上げる授業、同僚と創り上げる学校。それぞれの得意分野を生かし、互恵関係になれる、そんな集団（組織）になるために、「楽しい」を一緒に作り出す工夫をしていこう。

（5）最大の謎解きとなる「挿絵」

さて、本書の最大の「遊び心」は、この「挿絵」である。みなさんは、何を連想しただろうか。表紙の「Letter」。その中で、「明かり」のようなものが３つ、オレンジの明かりを灯し、「緑の葉」を照らしている。「四つ葉」ではなく、「三つ葉」。地面には「赤いハート」がそっと添えてあり、見守っているようである。章ごとに「挿絵」が変化する。「明かり」に照らされている「これ」は何なのだろう。「種」か、新たな「手紙」か…？２章ではこの「明かり」はくるりと首を回し、「これ」を上から照らしている。３章では「明かり」が２つに増え、４章ではまた首を回した「明かり」が別の角度から照らしている。では５章は…。なんと「ハート」の形が浮かび上がっているではないか。照らされている「これ」は一体何なのだろう。「モヤモヤ」が止まらない。さらにページをめくる。「おわりに」の言葉に心が震える。ふと目をやると、中嶋洋一先生の名前の横に、一輪の花が咲いている。なるほど「花」が咲くのか。ホッとしたのも束の間。本を閉じると、背表紙にまた挿絵が。「！？」。この水玉模様は「水」なのか？「明かり」だと思っていたこれは、水を注ぐ「シャワー」なのか？読み終わっても「モヤモヤ」は続く。この本を読んだあなたとぜひ「謎解き」を楽しみたい。

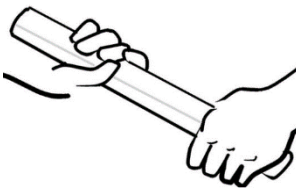


こうして読み解いていくと、これらの「遊び心」は、どれも「授業づくり」に必要な大事な「エッセンス」であることがわかる。好奇心がくすぐられ、「知りたい」「考えたい」が刺激されていく。「人」と「関わりたい」気持ちがムクムクと沸き起こる。

「これらを生み出すために『３つの力』を鍛えるんですよ」

本の向こうで、中嶋先生は微笑んでおられる。学習者への気づきを促す「遊び心」。これを「ナッジ」と呼ぶのだろうか。読者の「やる気」をつつき、促し、刺激する。「面白そう」「私もやってみたい」そんな気持ちにさせる「余裕」がこの本にはある。

本書は、中嶋洋一先生そのものである。「書くこと」に人は表れる。使う「言葉」に人が現れる。「感性」を何より大切にされ、目の前の「相手」のことを第一に考えておられる中嶋先生の「利他」の精神がいっぱいに詰まった、愛にあふれた一冊なのである。「３つの力」を学ぶことを通して、人としてどう生きるかを、私たちに問いかけている。これからの未来を生きる「教師」たちへ、そんな教師と出会う未来の「子供」たちへ。託された「バトン」を私たちでつないでいこう。



筆者のコメント（推敲するときに工夫したこと、反省したこと）

風見 郁江（4G）

対面塾での投票を経て、ビブリオバトル本選へ選出されました。オンライン塾生をも対象とした本選です。教員に限らず、指導主事や教育委員会の先生も含め、広く教育現場に携わる先生が、我々のレポートに目を通すことになります。よって「誰に向けて書くか」という視点を広げなければなりませんでした。みなさんの、「読んでみたい」「もっと知りたい」という気持ちを高めるにはどうすればよいか。「読者（学習者）の心にいかに火を灯すか」という命題が、ずっと私の目の前に掲げられていました。そこから考えたのが、次の５点です。

❶ 新刊本の内容に触れているが、全てを説明しすぎず、エッセンスだけを抽出している。

❷ 新刊本の内容理解を、身近な具体（比喩やエピソード）とつなげて説明し、読者の３つの「-ize」を助けている。

❸ つながり（のりしろ）に不自然なところがなく、読者の思考の流れを妨げない。

❹「序－本－結」の三段構成をとり、「本論」で５つの項目を展開し、一本の串で貫こうとしている。

❺ テーマやタイトルが、書き手自身の課題意識と重なり、読み手の共感を誘うものである。

これは合同研修の中で、第４グループの先生、そして多くの先生の文章を読んで学んだことでもあります。テーマや小見出しに「一貫性／つながり」があると最後までぶれずにしっかりと読めます。①具体例や比喩、エピソード（読者にとっても身近で共感を得るもの）②原理・原則　③自分の実践といった構成で展開すると、読者の思考を整理してくれます。引用で端的に示す、before＆afterで納得させる、インパクトを与える（印象に残す）、過去の自分を自己開示するなど、読者の心を揺さぶる方法には原理・原則があることを学びました。こうして何度も推敲を繰り返し、本選へ提出しました。

一度書いたものを思い切って捨てる、というのは難しい作業です。もったいないから、せっかく作ったのだから、という理由で、「引き算」できないと新しいものは生まれません。こだわって作ったけど、一度壊して作り変えてみる、という新たな試みもまた「遊び心」です。「要約」「編集」の際に本当の意味での「読解」が問われます。何を引き、何を足すか、本質が見抜けていないとできません。

今回のビブリオバトル（予選）では、私は素案から一度俯瞰して全体を見ることにし、新たな書き方を試みました。本選は、さらに何を引き、何を足すか、それを考える必要がありました。それが本当に難しかったです。一度思い込んだ考えを捨てる。リフレーミングをする。さらに、枠の外からも見る。

先日、対面塾の例会で教わった「水平思考」が思い出されます。その思考を促すヒントとなったのが、対面塾やオンライン塾の皆さまからのコメント（新たな視点）でした。

一旦、枠の外に出て、冷静に振り返ってみる。

この作業がリニューアルには欠かせないのだと学びました。

自分の文章が、まだうまく書き表せないのですが、嬉しい悩みはこれからも続きます。